

福島県川内小学校における復興子ども教室の実施

長崎大学教育学部 全 炳徳, 井上桃子

1. はじめに

福島県双葉郡川内村は2011年3月の東日本大震災, 東京電力福島第一原子力発電所事故によって, 全村避難を余儀なくされるなど, 有史以来の甚大な被害を受けた。村の復興, 新しい村づくりには, 放射線への対応, 人口減少の課題に対して, その対策を将来にわたって継続していかなければならず, 一部は子ども達の世代に託さざるを得ない。

原子力災害の影響の長期化が深刻となる中, 川内村の将来を担う子どもたちが, 被災体験を乗り越え, 将来地域の復興に関わり, 社会に貢献できる「強さ」と「いのち」を大事にする力が求められている。

本研究は川内村の子ども達が, 被災体験を乗り越え, 川内村の置かれている状況を理解し, 地域の復興, 社会に貢献できる「強さ」と「いのち」を大事にするちからを育成すること目的とした。

特に, 長崎大学は福島県下で初めて帰村宣言を行った川内村と包括的連携協定を締結し, 村内に長崎大学・川内村復興推進拠点を設置するなど, 密接に連携しながら村の復興に向けた取り組みを支援している。それを受け, 「復興子ども教室」には川内村や村の教育委員会とともに, 長崎大学が参画しており, 大学生が児童に対し, 長崎原爆に関する知識普及を目的とした授業や, 児童の近い将来のイメージ作りを目的としたワークショップを行う場を設けた。

2. 復興子ども教室の実施 (川内村)

2.1 授業のねらい

今回の授業の狙いは大きく二つある。

第一に, 長崎原爆に関する知識を普及することである。

長崎市は原子爆弾による廃墟から現在の繁栄を創り上げてきた。その長崎の復興の過程と, 長崎原爆に関する基礎知識を示し, 災害から復興までの垣間見ながら, 生きる力や命の強さはもちろん, 平和を願う心や命の大切さ, 人が持つ強さを自覚できるようにすることが狙いの一つである。

第二に, 川内村の魅力の再確認である。

今後の川内村復興のためには, 震災後の課題に対する対策を将来にわたって継続していかなければならない。更なる災害にも備えなければならない。そこで, 子どもたち自身が暮らす川内村の良さを具体的に考えたり, それに関連した活動をしたりすることで, 自分たちの故郷への興味・関心と理解を深められるようにすることがもう一つの狙いである。

2.2 児童の実態

児童の実態としては、震災後に小学校が再開した際、帰村した子どもたちは村の変化を目の当たりにしているとともに、全体の児童数が約5分の1となり、友人関係をはじめとする学習環境が大きく変化している。

また、子どもたちはこの授業までに、総合的な学習の時間において震災以前の川内村の歴史を学び、どのようにこれまで村が生き抜いてきたかに触れている。加えて、直前の時間に長崎大学医学部保健学科の学生による、放射線防護や健康に対する影響に関する客観的かつ科学的な放射線学習を受けている。

2.3 授業案

過程	授業のしくみ		時間	
	子どもの取り組み	教材と教師のはたらきかけ		
導入・長崎のことについて	<p>1. グラフを見て、長崎の人口が減っている理由を考える。</p> <p>長崎原爆について、当時の被害状況などを理解する。</p> <p>長崎の街が復興してきたことを読み取る。</p>	<p>教材 1</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長崎の地図 ・被害のあった地域に色付けた透明のフィルム <p>教材 2</p> <ul style="list-style-type: none"> ・被爆前後の写真 ・矢印 ・各地の名称が書かれた文字カード <p>教材 3</p> <p>各地の現在の長崎の写真</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○原爆投下の前後の長崎の人口グラフを見せ、人口の減少の理由を考えさせる。原爆についての基本的な知識を教える。 ○長崎の地図を提示し、地図上で被爆後の被害の広がり状況を地図に加える。 ○山王神社、浦上天主堂が受けた被害の様子を被爆前後の写真を提示しながら説明することで、子どもたちは原爆の威力や、長崎の町が原爆により破壊され、大きな被害を受けたことに気づくことができるだろう。 ○さらに、現在の長崎の写真を提示し、被爆前・被爆後・現在の写真を比較させることで、子どもたちは、破壊された街は、復興しているということに気づくことができるだろう。 	10分
	<p>2. 被爆者の方のビデオメッセージを見て、当時の様子をイメージし、長崎の人はどのような思いで復興させてきたのか知る。</p>	<p>教材 4</p> <p>ビデオレター</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○69年前に被爆体験をし、長崎の復興とともに人生を送ってこられた方が長崎にはいらっしゃることを伝える。 ○被爆者の一人である山川剛さんからビデオレターがあることを伝え、ビデオを流す。 	

川内村のことについて	3. 川内村のいいところを探し、自分が思いついたことを一つずつふせんに書く.	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> 教材 5 ・ ふせん ・ 油性ペン </div>	<p>○「川内村のいいところ」を私たち大学生に教えてほしいという趣旨で、川内村のいいところ探しをし、大きめのポストイットに書くよう指示する.</p> <p>○子どもたちから出る意見は、はじめは抽象的ないところが多いだろう. そこで教師は、より深く川内村を見つめて、具体的ないところを見つけられるような問いかけを行う.</p>	7分
	4. 2つのグループに分かれ、川内村のいいところマップをそれぞれのグループで作成する.	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> 教材 6 ・ 川内村の地図 ・ 油性ペン </div>	<p>○個人で考えた川内村のいいところをもとに、3人グループで川内村のいいところマップを作成し、そのマップの名前を決めてもらう.</p> <p>○グループでマップを作り上げることで、初めて気づく川内村のいいところがあるなど、改めて村の良さに気付くことができるだろう.</p>	7分
	5. それぞれのグループで作成した川内村のいいところマップを、発表する.	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> 教材 7 マグネット </div>	<p>○グループ別に作成したいいいところマップを黒板に貼り、一人ずつ紹介してもらう.</p> <p>○他のグループの発表を聞くことで、さらに川内村には多くの魅力があることに気付くことができるだろう.</p> <p>○加えて、子どもたちが自分の街のことを発表する体験で、表現する力を育てたい.</p> <p>○まとめとして、①川内村にはたくさんのいいところがあること、□きっと今回見つけたものの他にもたくさんのいいところがあるだろうということ、□まだ知らない川内村の魅力をこれから見つけていこうということを確認する.</p>	7分
まとめ	6. 山川さんからのビデオレターを見て、未来への想いを確かにする.	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> 教材 8 ビデオレター </div>	<p>○最後に、先ほどのビデオでお話した、山川さんから、児童へのメッセージがあることを伝え、ビデオを流す.</p>	7分

2.4 授業の様子

福島での授業の様子を写真1と写真2に示す。



写真1 「長崎を知る」授業場面



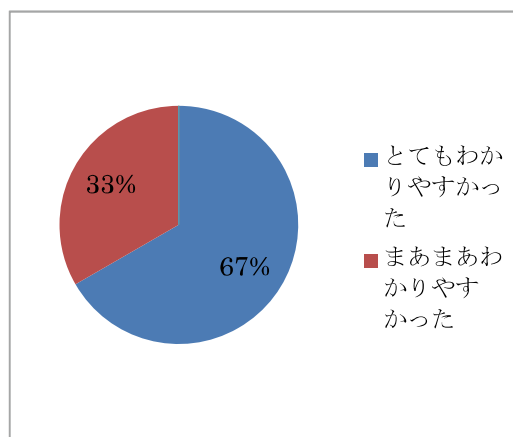
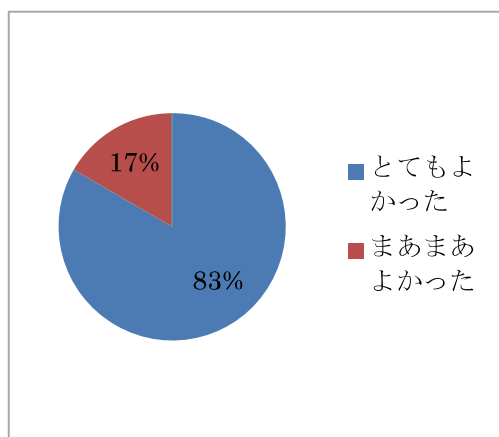
写真2 児童作成の川内良い所マップ

2.5 授業後アンケート集計結果

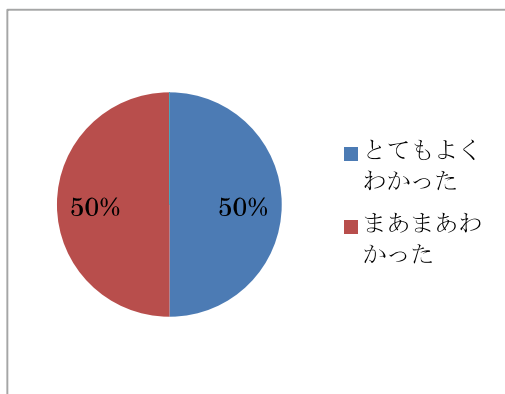
対象：授業参加者（小学5年生5名，6年生1名）

評価：5段階（とても良い，まあまあ良い，普通，まあまあ悪い，とても悪い）

設問1：今日の授業はどうでしたか？ 設問2：授業の内容はどうでしたか？



設問3：長崎の復興のようすは？

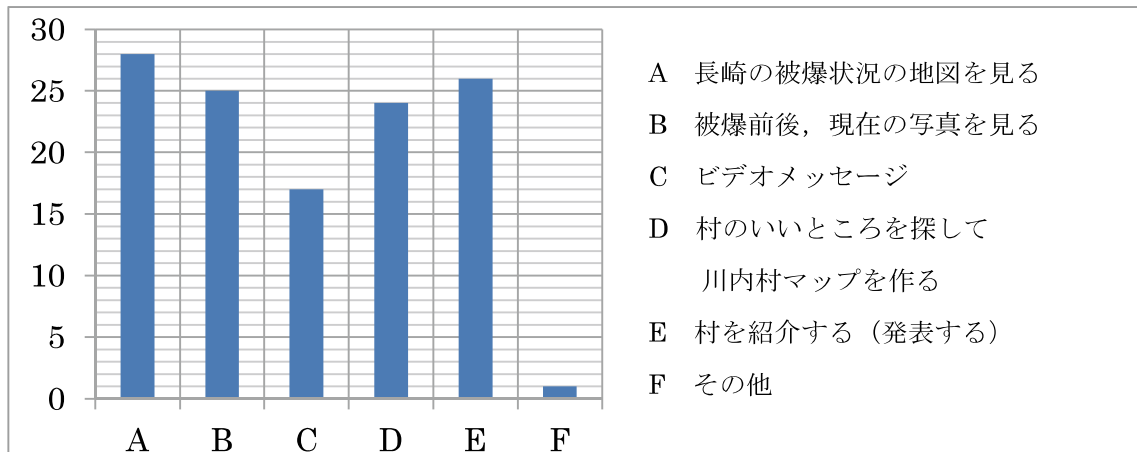


結果から，この授業は全体的に満足している。しかし，長崎の復興についての内容がわかりづらく，特に子どもたちは，長崎の平和学習のような長崎原爆に関する学習の基礎的な概要を学ぶことから始める必要があった。教授する内容やその情報を伝える言葉や方法などは，相手が何をどのように教わるとわかりやすいのかをじっくりと思索する必要がある。

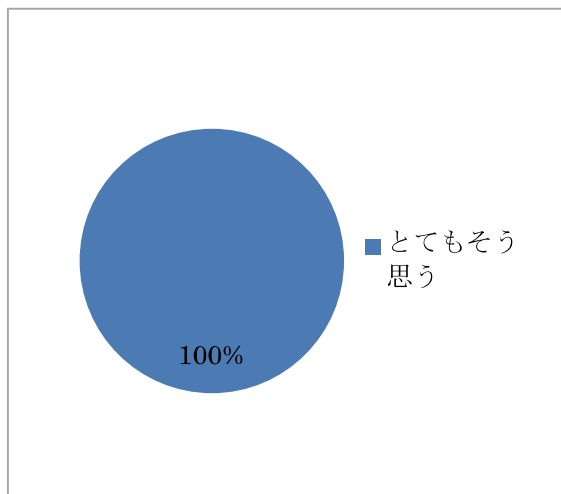
表1 今回の授業で印象深く残った教材

	①	②	③	④	⑤	⑥
性別	男子	男子	男子	女子	女子	女子
印象強 (数値化:6)	E	B	A	A	D	D
(数値化:5)	A	A	B	D	B	E
(数値化:4)	B	E	E	E	C	A
(数値化:3)	C	D	C	C	E	B
(数値化:2)	D	C	D	B	A	C
印象弱 (数値化:1)					F	

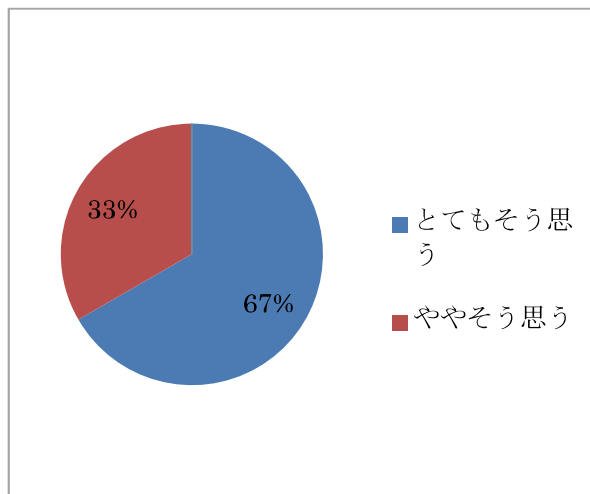
表2 印象深い授業の内容をグラフ化したもの



設問：川内村のことを考えるよい機会になりましたか？



設問：今後も川内村のことを周囲に発信していこうと思いますか？



前項の表やグラフの結果から、「長崎の被爆状況の地図を見る」ことが最も印象深いという結果であった。これは今回取り入れた内容であり、被害の様子（写真）だけでなく、爆心地からの距離（地図）と結び合わせることで、被害にあった範囲や規模を具体的にイメージできたのではないかと考えられる。

選択肢では「ビデオメッセージ」が下位に評価されているが、自由記述の感想の中には「ビデオメッセージ」のことが書かれているものもあり、児童の心に響いたものであったことは間違いのないようである。加えて、子どもたち全員が川内村を考える契機になったようであり、村を外部に発信していこうという意識がおおむねあることを感じ取ることができた。

2.6 授業改善に向けて

復興子ども教室は今回が2年目を迎えている。1年前の授業では、長崎の原爆からの復興から川内村の原発からの復興を考えるという「復興」という共通性をもった授業であった¹⁾。だが、この2つの復興は本質的に違うのではないだろうか、という壁にぶつかっていた。遠く離れた場所で起こった過去の出来事から、自分たちの村の未来を考えるとところまでの内容を、45分という時間の制約の中でおこなうのはかなり困難である。だからといって、子ども自身の問題に還元しなければ、単なる歴史の勉強になるだけにとどまる。そこで、今回は、過去の異なる地域の出来事を知ることから、自分の村の“今”に目を向けるところまでに授業の主題を設定した。

原子爆弾が投下され、廃墟と化した長崎をもう一度活気ある街にしよう、長崎を最後の被爆地にしよう、と精一杯生きてこられた偉大な先人たちの強い思いに焦点をあてることで、物理的な復興だけでなく人間一人ひとりがもつ人の強さに意識が向くようにした。しかし、一貫性があつた授業とは言い難い。関連させるべきなのかという点については、著者自身迷いの残った授業になってしまった。子どもたちにとっても、混乱したのではないかと考えるので、どのように関連性をもたせるのかという点は、今後の課題としたい。

また、教材については、地図の上に被爆状況の範囲が塗られた透明のフィルムを被せる教材を用いることで、視覚的に爆心地からの距離がわかるようにした。その教材が、児童にとって最も印象に残っている授業内容であることが分かった。また、被害の大きさや復興した街の様子がわかるよう、片足鳥居を取り上げ、被害前・被害後・現在の3枚の写真を教材にしたが、児童の自由記述感想の中に、驚いたこと、すごいと思ったこととして、このことについて触れられていた。

以上のことから、視覚的な教材が児童の記憶に残っているということが分かった。今後も、視覚的教材を中心に、児童にとってインパクトがあり、具体的にその様子がイメージできるような教材を準備する必要があると分かった。これも今後の課題にしたい。

3. 復興子ども教室の実施（長崎）

3.1 目的・ねらい

復興子ども教室は現地（福島県・川内村）での授業と、長崎での授業とで構成されている。ここでは、長崎で実施した授業（ワークショップ）の様子を含めて報告する。

まず、ワークショップの目的と狙いである。

第一に、自身の近い将来のイメージ作りにチャレンジすることである。川内村の子どもたちは、平成23年3月に富岡高校川内校が廃校となり、地域の高校生との交流によって得られていた高校生（お兄さん・お姉さん）像を思い描くことが困難になっている。そこで、今回は大学生との交流を行うことで、近い将来の高校生、大学生のイメージ作りの一助にしたいと狙いを定めた。

第二に、情報発信の意義の認識、表現力の育成である。帰村宣言をした川内村での暮らしを送っている子どもたちが、村を知らない人たちに向けて、村の魅力を発信する模擬体験をすることがもう一つの狙いである。その活動を通し、村内だけでなく外部にも目を向けることができるようにし、今後もっと村をアピールしたいという気持ちを育てたいこと、また、自分たちの思いや考えを、言葉や動作、全身で表現することができるようにしたい狙いがあった。

3.2 ワークショップに至るまで

2014年8月7日に長崎大学教育学部に場所を移しておこなう、今回のワークショップへ向けて、授業を準備する側は奮起した。また、本番には2人が参加できないという事態になり、新たに2人の授業者の協力を求め、授業者は全員7人の思いが詰まったワークショップになった。

前回の授業で大学生各自が知り得た子ども一人ひとりの特徴を書き出し、より具体的な児童像を思い描くことができるようにした。また、前回の授業の反省から、具体的な活動イメージを共有すべく、合計22回、約80時間にも及ぶ授業準備のための集会を行った。

3.3 ワークショップの概要

本授業は、福島の授業で取り上げた「川内村のいいところ」に焦点をあて、その魅力を自分たち以外の人にも知ってほしいという子どもの動機から、コマーシャル作りをおこなうことにした。大学生が作ったコマーシャルを見た上で、児童自身が役やセリフを考え、動きのあるコマーシャル作りをおこなう。その活動を通し、いかにして自分の思いや考えを周囲に伝え、外部に発信していくかという体験ができるようにしたいと思った。

また、村の高等学校が廃校になり、村全体の子ども数も少ないため、憧れの存在が近くにないという課題がある。したがって、大学生は子どもたちとたくさん会話をし、一緒になって楽しみながら積極的に活動を盛り上げたいと思った。

3.4 授業の様子

長崎での授業の様子を写真3と写真4に示す。



写真3 「作成」の場面

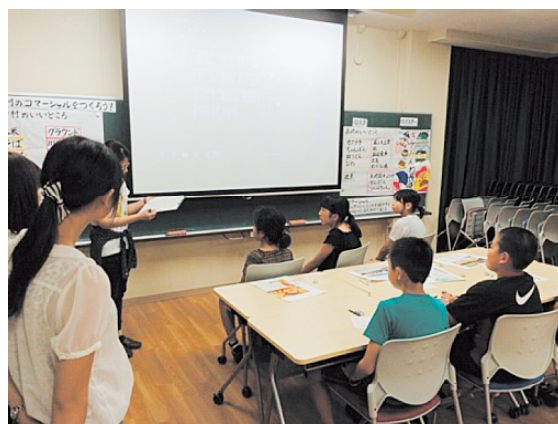


写真4 「まとめ」の場面

3.5 逐語記録にもとづく分析

言語は、人に知識や感情を伝えるコミュニケーション手段の一つである。今回はワークショップであったが、授業においては、教師の言語活動によって児童の言語活動が引き出される特徴があるとされている。

今回のワークショップ中の発言を全て文字起こすことで、逐語記録を作成した(教師側と児童側の対話記録)。その記録をもとに、教師役である5人の大学生の言語活動に注目し、どのような特徴があるのか、また、どのような大学生の発話が児童の発言や行動を引き出すことができているのかなどを検討し、このワークショップを評価した。

分析の過程としては、まず逐語記録をもとにそれぞれの大学生の発話を「説明」「イエス・ノー・クエスチョン」「選択肢のある問」「オープンクエスチョン」「全体への提案」「全体への指示」「個人への問いかけ・提案」「評価・反応・共感」「復唱・全体での共有」の9つのカテゴリーに分類した。そして、それぞれの発話に対して、児童が発言したり、頷いたりするなどの何らかの反応が見られた回数を全体・5人の大学生別に集計した。その後、それぞれのカテゴリーにおける子ども一人当たりの反応数(合計÷児童数6人、児童一人当たりの反応数、「個人への問いかけ・提案」については、全体に対してではなくその子だけに対して発話したものであるため、平均は必要なく、求めていない。表3の“平均”※1)や、教師の発話数に対してどの程度子どもの反応が返ってきたかの割合(平均÷各カテゴリーにおける大学生の発言数×100、大学生の発話数に対する児童一人当たりの反応数の割合、「個人への問いかけ・提案」については、“合計”÷そのカテゴリーにおける大学生の発言数×100で割合を求めた。表3の“割合”※2)を求めた。下記の表3はワークショップ全体の大学生の発話、それに対する児童の反応を表したものである。

表3 大学生の全発言における発話の特徴と、それに対する児童の反応

逐語の内容	大学生	児童	平均※1	割合※2
説明	43	8	1.333	3.1%
イエスノークエスチョン	41	81	13.5	32.9%
選択肢のある問	5	4	0.667	13.3%
オープンクエスチョン	18	2	0.333	1.9%
全体への提案	46	47	7.833	17.0%
全体への指示	23	49	8.167	35.5%
個人への問いかけ・提案	54	43		79.6%
評価・反応・共感	62	0	0	0.0%
復唱・全体での共有	19	6	1	5.3%
全発言数	311	240		

大学生は、「いいね！」や「おお！ぼっちり！」など〈評価・反応・共感〉の言葉を最も多用している。子どもたちの発言や行為を肯定し、称賛することで、子どもたちがより意欲的に参加できるように、ワークショップを盛り上げようとしていることが分かる。

次いで、〈個人への問いかけ・提案〉が多く使用されている。子ども6人に対し大学生が5人いたことで、全体を見て指示を出す司令塔としての役割だけをおこなうのではなく、活動中は各大学生が子どもたちの会話の中に入り、より近い位置で提案や質問をすることで子どもの考えをより引き出すことが可能になった。それと同時に、それぞれの大学生が子ども一人ひとりとコミュニケーションを密にとろう、その子のことを知りたい理解したいという思いがあったからこそ、個人に積極的に発話したのではないかと考える。

児童は、大学生も多用していた〈個人への問いかけ・提案〉に対して、最も多くの割合で反応を示している。全体に問われるよりも個別に問われる方が、自身の問題として意識しやすいということは誰もが考えることである。ただ、その数値が他の項目の割合とあまりにかけ離れているのではないか。それは、5・6年生合わせて6人の児童数で普段の授業もおこなわれることで、教師の目が児童一人ひとりに行き届き、それぞれの児童に向けた発話が多く取り入れられたり、教師と一対一で話す機会が多かったりするからではないだろうか。つまり、児童にとって全体に問われるよりも、個人に問われることに慣れているからではないだろうかと考えた。

3.6 授業改善に向けて

前頁にあるように、個人への問いかけに対する反応が8割近くあるのに対し、全体への発問では手を挙げて自ら発表する児童はいなかった。だからといって、

児童の反応が良いから、今後は個人への発問のみの授業を展開しようというわけにはいかない。それは、川内村には高等学校がないので、児童たちは近い将来隣町へ行き、40人近い人数で授業を受けるときが来るであろう。その時には、クラス全体へ投げかけられた問いであっても、自身の問題と捉えて積極的に授業を受けることが求められる。

だからこそ翌年以降の授業では、その練習になるように、全体への問いかけであっても児童それぞれが意識できるような発問をすることで、個人への発話を不必要に多用せずとも児童の反応が見られるようにしたい。児童全員が揺さぶられるような発問を熟考する必要があるようだ。そして、個人を指名する前に、「分かった人は手を挙げてみよう！」など、挙手したうえで自分の考えを発表するという機会を増やすべきではないかと考える。

4 結論

今回は視覚的な教材が児童に有効であったといえる。ただ、それと同時に、長崎の復興についての教授方法について、改善が必要であることも忘れてはならない。授業では、基礎的な部分を省くことなく、児童がより具体的にその様子がイメージできるような教材を準備する必要がある。

著者がおこなった授業とワークショップでは、どちらも体験活動を重視した。結果として、授業では児童自身が考え、体を動かし作り上げる活動があったことで、それぞれの児童が自身の問題として捉え、子どもたち全員が川内村を考える契機になったと答えたと考えられる。またワークショップでは、体験活動をメインにすることで、大学生が子どもたちの間に入り、近い位置で会話することができ、ねらいであった大学生のイメージ作りの一助になったと推察される。児童が実際に様々なことが体験できるような活動を、来年度以降の授業においても取り入れるべきであると考えられる。

今回、授業やワークショップをおこなうことで、児童の実態の把握不足を痛感し、児童観の重要性を実感した。どの子どもをも対象にできる普遍的な授業を考えるべきではないかという意見もあるだろう。しかし、児童が主体性をもった授業をするには、その児童が置かれている環境や背景を考慮すべきである。その上で、この授業には何が求められているのかを読み取り、授業内容をはじめとする、教材や発問方法、児童との関わり方などにおいても変化させることで、効果的な授業が展開できると考える。来年度以降の授業では、今回以上に児童の実態を加味し、これまでの2回の実践にとらわれない、ニーズにあった新たな授業の創造を期待する。

参考文献

1. 全炳徳, 高村昇, 下田杏奈: ESD教育の試み「復興子ども教室」の実践, 教育実践総合センター紀要, No. 13, pp. 311-318, 2014. 3.